機能的アサーション尺度作成の試み (2)

アサーション・トレーニングによる尺度得点の変化

○三田村 仰¹・一言 英文²

(¹ 関西福祉科学大学 社会福祉学部・² 関西学院大学 国際教育・協力センター)

キーワード: 機能的アサーション, 妥当性, アサーション・トレーニング

Development of the Functional Assertiveness Scale (2): Alteration of scores of the scale by assertiveness training

Takashi MITAMURAI¹ and Hidehumi HITOKOTO

(¹ Kansai University of Welfare Sciences, Department of Social Welfare,

² Kwansei Gakuin University, Center for International Education and Cooperation)

Key Words: functional assertiveness, validity, assertiveness training

目 的

アサーションとは自他を尊重した適切な自己表現である。アサーションの定義にはさまざまなものがあるが、アサーションをその表現形態ではなく、有効性によって定義するものとして「機能的アサーション」が提唱されている(三田村・松見, 2010)。機能的アサーションとは「話し手がある課題達成の必要性に迫られた状況下で、当該の課題をより効果的に達成し(課題達成の機能)、かつ聞き手から、より適切と判断される(語用論的配慮の機能)対人コミュニケーション」である。三田村(2014)はこの概念を測定するために「機能的アサーション尺度」を作成した。機能的アサーション尺度は、「課題達成」と「他者配慮」の2因子によって構成される。本研究の目的は機能的アサーション尺度の妥当性の検討の一環として、介入による尺度得点の変化を確認することであった。

方 法

参加者: 臨床心理学の演習の授業の受講生の内、同意が得られた男子14名、女子35名(計49名)であった。平均年齢は20.02歳($SD = 2.67$)であった。

実験デザイン: 参加者をランダムに介入群と統制群に振り分けた。参加者は、介入群ではアサーション・トレーニングに参加した。統制群では臨床心理学についての講義を受講した。いずれも臨床心理学の授業時間のなかでおこなわれた。**機能的アサーション尺度:** 課題達成尺度6項目と語用論的配慮尺度6項目の計12項目について、「いつもそうでない」(1点)から「いつもそうだ」(5点)までの5件法で回答を求めた(三田村, 2014)。尺度への回答は介入の前後(プレおよびポスト)の時期におこなわれた。

アサーション・トレーニング: トレーニング・プログラムは第1著者によって90分×7セッションおこなわれた。プログラムの内容は、機能的アサーションの発想に基づき、課題達成と語用論的配慮についての内容が扱われた。また、通常のアサーション・トレーニングとの違いとしては、「アサーション権」が扱われないこと、反対に、間接表現や婉曲表現が扱われた。Table 1にプログラムの概要を示す。

Table 1 プログラムの各セッションのテーマ

セッション	テーマ
1	アイスブレイク
2	アサーションとは
3	断る
4	頼む
5	肯定的な気持ちを伝える
6	言いにくい場面での対応
7	まとめ

結 果

2要因混合計画(群×時期)の分散分析をおこなった。統計解析にはRを使用した。各群のプレ・ポストにおける機能的アサーション尺度の平均得点をTable 2に示す。

分散分析の結果、時期の主効果($F(1, 47) = 9.02, p < .01$, 偏 $\eta^2 = .16$)と交互作用($F(1, 47) = 5.43, p < .05$, 偏 $\eta^2 = .10$)がそれぞれ有意であった。単純主効果の検定をおこなった結果、プレにおいては群の差は認められず、ポストにおいて群の差が認められ、介入群の方が統制群よりも有意に高得点であった($F(1, 47) = 4.68, p < .05$, 偏 $\eta^2 = .09$)。

Table 2 各群のプレ・ポストにおける機能的アサーション尺度の平均得点

	プレ	ポスト
介入群 ($n = 25$)	37.16 (6.06)	42.12 (6.21)
統制群 ($n = 24$)	37.67 (6.18)	38.29 (6.18)

Note. 括弧内はSD

考 察

アサーション・トレーニングへの参加によって、参加者の機能的アサーション尺度得点の上昇が示された。このことから機能的アサーション尺度の妥当性が示唆された。

機能的アサーション尺度は自己報告式の尺度であるが、今後、自己報告による機能的アサーションがどの程度実際の機能的アサーションの程度を適切に評価できているかに関し、他者評価による測定との相関を検討するなど、さらなる妥当性の検討が期待される。

引用文献

- 三田村仰・松見淳子 (2010). 相互作用としての機能的アサーション パーソナリティ研究, 18, 220-232.
三田村仰 (2014). 機能的アサーション尺度作成の試み—課題達成と他者配慮の2次元から成るアサーション概念の測定. 第78回日本心理学会大会発表論文集, p. 145.